



# チリ鉱山、救出劇の再発防止は

## Ⅱ 急がれる安全対策Ⅱ

鈴木克彦

時事通信社・サンパウロ支局特派員

### ◇過熱の一途

南米チリの北部コピアポ郊外にあるサンホセ鉱山で起きた落盤事故で、地下700メートルに閉じ込められた作業員33人が69日ぶりに救出された「奇跡の生還劇」。閉塞感が漂い、暗いニュースが連日のように伝えられる中、久しぶりに「人智の驚異、人間の素晴らしさ」を感じさせる希望に満ちたニュースとなった。ただ、同じような事故を繰り返すことは許されない。しかし、再発防止への道筋は、いまだ重い課題として手つかずのままだ。

作業員33人が避難所に閉じ込められる落盤事故が起きたのは8月5日。地元メディアによれば、事故の3時間前に大きな「異常音」が聞こえ、作業員が地上への脱出を求めているが、その要求が鉱山運営会社側に却下された直後のことだった。

世界が沸き立つ。世界中のメディアが一斉に伝え、取材が過熱するのは、まさにこの時が始まりだった。

救出が間近に迫った10月上旬、事故現場のサンホセ鉱山のふもとで、長丁場となる取材の準備を整えた。家族らが生還を待つキャンプ村「エスペランサ（希望）」に押し寄せた世界中の報道陣の数は、尋常ではなかった。一角では、チリ大統領府の職員らが取材申請する報道関係者に登録証を配布していたが、ある職員は「もう何人申請したかは正確には分からない」。最後に記者が見た時は

それから17日後、作業員は地上から安否を確認するために下りてきた掘削ドリルに赤ペンで走り書きしたメモをくくりつけ、送り返した。「われわれ33人は避難所において無事」。生存を伝える待望の知らせに、家族や

世界が沸き立つ。世界中のメディアが一斉に伝え、取材が過熱するのは、まさにこの時が始まりだった。

救出が間近に迫った10月上旬、事故現場のサンホセ鉱山のふもとで、長丁場となる取材の準備を整えた。家族らが生還を待つキャンプ村「エスペランサ（希望）」に押し寄せた世界中の報道陣の数は、尋常ではなかった。一角では、チリ大統領府の職員らが取材申請する報道関係者に登録証を配布していたが、ある職員は「もう何人申請したかは正確には分からない」。最後に記者が見た時は



ピニエラ大統領（右）に出迎えられた現場監督ルイス・ウルスアさん（左）（2010年10月13日）。[写真／AFP=時事]

既に2000番台に迫る勢い。ただ、登録証にはそれぞれ番号が振られているが、これがないと鉱山までの出入りすら認められないため、タクシーの運転手やら、現地の通訳やらも含まれ、さらに誤字で廃棄した分もあると聞けば、分からなくなるのも当然だった。

キャンピングカーや大型テント持参で陣取っている地元チリや欧米の主要メディアはともかく、大半は乗ってきた車の中や集合テント内で、砂漠の夜の冷気に凍えながら、砂まみれでパソコンをたたき、ポラントピアの方々が無料で提供してくれる飲み物や食事の温かみは格別で、世紀の救出劇という眼前の出来事と共に、張り詰めた気持ちもふわりと和らぐのを感じていた。

#### ◇感動のドラマの陰で

地表から深さ約620メートルまで掘り進んだ直径70センチ弱の縦穴から、作業員が救出用カプセル「フェニックス（不死鳥）」で一人ずつ地上へ引き上げられる様子は、詳細に繰り返す必要もないだろう。カプセルから出てくる作業員のささいなしぐさや言葉、迎える家族の揺れ動く表

情、キャンプ村で生還を見守る人々の歓喜と涙……。そこには、数え切れない人間ドラマが凝縮されていた。生還した作業員の中で、記者が特に印象に残ったのは、救出開始から約22時間後、33人の最後に引き上げられた現場監督ルイス・ウルスアさん（54）だ。サングラス姿のウルスアさんは、出迎えたピニエラ大統領に、少し硬い表情でこう語りかけた。「Te paso el turno（次はあなたに順番を渡します）」。交代制で働く鉱山作業員が仲間内でよく使う言葉だという。そして、続けた。「二度とこのような事が起きないようにしてください」。

救出の喜びや安堵、神への感謝ばかりがクローズアップされていただけに、まさかこういう言葉が出てくるとは予想していなかった。それと

共に、70日間も極限の環境下で生き抜いて来た男の言葉の重みというものを、ひしひしと感じた。「Recibo su turno (あなたから引き継ぎます)」と笑みを浮かべて答えたピニエラ大統領は、果たして何を思ったのだろうか。

チリは世界一の銅埋蔵・生産国。しかし、豊富な資金や技術を持つチリ銅公社(コデルコ)などが所有する大規模鉱山を除くと、危険性が指摘される中小規模の鉱山が数多い。今回の落盤事故が起きたサンホセ鉱山では、2007年の爆発事故で作業員が死亡して、いったんは閉鎖された。だが、翌年には安全基準が疑わしいまま操業が再開され、結果的に今回の事故につながった。今年に入っても、作業員が負傷する事故が起きていた。

アタカマ大学のフェリペ・アギレラ教授(地理学)は「鉱山では通常、鉱石を取るための起爆方法なども手順が細かく決まっているが、サンホセのような小さな鉱山では、こうした安全対策が軽視されている。鉱山の構造や知識もないままに働いている作業員も多く、非常に危険だ」と指摘する。同教授は安全向上策の一つとして、地質研究と鉱山監視を一括して担当する国立地理鉱山局(SERNAMEMIN)を再編し、その中でも鉱山の安全監視員を増やすべきだと主張している。

今回はハッピーエンドだった落盤事故だが、このような出来事が繰り返されないようにするにはどうすべきか。大地震直後の今年3月に発足したピニエラ政権に課された新たな責務だ。チリでは毎年、鉱山事故で

30人以上が命を落としているとの報道もある。ピニエラ大統領は救出劇を受け、事故を繰り返してきたサンホセ鉱山の閉鎖とともに、鉱山労働者の安全対策強化、鉱山運営会社への責任追及を徹底する考えをたびたび強調しているが、その議論が深まるかどうか、法規制の強化にまで踏み込めるかどうかは予断を許さない。

#### ◇強まる不満

作業員の生還後、最初の日曜日となった10月17日。報道陣や家族が続々と撤収し、半ば閑散としていたキャンプ村「エスペランサ」が、朝から再び慌ただしくなった。この日は、救出された作業員の生還に感謝するミサが開かれ、10人以上の作業員が救出後初めて、キャンプ村に足を運んだためだ。

ミサは国营テレビの取材クルーを

除き、報道陣には原則非公開。それでも作業員の肉声を聞こうと、多くの取材陣が待ち構え、フェンス越しに動向を見守っていた。

その時、報道陣の前に突如現れたのは、サンホセ鉱山を運営していたサンエステバン社に雇用されていた鉱山労働者たち。「ピニエラはショーのために動いている」「労働者に尊厳を」などのプラカードやチリ国旗を掲げ、楽器や大声で氣勢を上げた。

同鉱山は落盤事故で操業を停止し、労働者は失業状態。生活難に業を煮やす形で、未払い給与や失業手当の早期支払いを訴えたかったのだ。

「ここには33人だけではなく、作業員は300人もいる。わたしたちは差別され、置いてきぼりだ。今声を上げないと、政府は何もしてくれない。支払いの保証をもらえなければ、

『エスペランサ2』をつくってここにとどまる」と参加した女性マルタ・ドウランさんは早口でまくし立てる。この様子はミサと共に、世界中のメディアに報じられ、注目を浴びた。

サンエステバン社は家族などから多額の損害賠償請求を受けているが、既に破産手続きが進行中で、支払い能力には疑問が残る。今回の救出劇に要した最大16億円ともされる費用は政府が一部肩代わりしているが、同社に今後請求するとの情報もある。安全軽視のツケは大きい。それだけではなく、そこで奉仕してきた人々の心にも、深い傷を残した。

#### ◇支持上昇、指導力に期待

今回救出された作業員らは、各報道陣のインタビューの見返りに多額の謝礼を求めているとされる。一部の報道では、そうして集めた資金は

すべてプールし、同じように危険な鉱山で働く作業員の労働条件を改善するための基金を設けたい考えだという。政府の無力に嫌気し、自分の生活と命を守るための自衛手段とすれば、報酬を求めざるを得ない心境も、少し分かるような気がする。

救出劇で陣頭指揮を執ったゴルボルネ鉱業相は、チリで多発する鉱山事故について「交通事故と同じで、起るときは起きる。ゼロにはならない」と言い切っていた。ただ、救出を見事に「演出」し、知名度と支持率が上昇している今こそ、同相や大統領には強い指導力を発揮し、結果的には美談となった今回の「悲劇」を起こさない決意と努力、行動を示してもらいたいと、多くの国民や世界中の人々が望んでいるはずだ。

(すずきかつひこ)